



創価学会の誓ひへ (5)

池田大作について(その2)

⑥「池田先生のおかげで、これまで信心を続けることができた」

ほとんどの創価学会員は、「池田先生のおかげ」「組織のおかげ」と思い込んでいますが、これはことあるごとに幹部が一般会員に対して、池田大作や創価学会の恩恵を強調し、押しつけてきた一種の洗脳教育によるものです。

冷静に考えてみてください。池田大作や組織のために尽くしてきたのは、あなたのほうでしょう。あなたの方学会員が、財務や広布基金に私財を投じ、さらには選挙のF取りや新聞啓蒙などの学会活動に励んだことによって、今日の池田創価学会の権力や財力が築かれてきたではありませんか。

ですから、あなたが池田創価学会に恩があるのではなく、かえって池田大作や創価学会があなたから恩を受けているのです。

もし、あなたが「池田先生の指導によって日蓮大聖人の仏法を信心することができた」というならば、あなたは大きな考え違いをしています。

なぜならば、現在の池田創価学会は、日蓮大聖人の仏法とは異質の邪宗教になり下がっており、その池田大作を信奉しているために、あなたはいまだに真実の仏法に帰依することができず、仏法

破壊の悪業に荷担させられているからです。

あなたが池田大作に対してどのような感情を抱いているにせよ、末法の仏は日蓮大聖人のみであり、その教えに従うことを第一としなければ、真の幸福は決して得られないのです。

⑦「池田先生は、一人ひとりの会員を常に大事にしてくれる」

池田大作が本当に会員の一人ひとりの幸福を願うならば、会員に対して正しく日蓮大聖人の仏法に随順することを教えるはずですが。

しかし、今や池田創価学会は、大謗法集団になり果てており、その原因は池田大作の驕慢謗法にあります。

池田大作は、自らの謗法を悔(く)い改めるどころか、会員までも仏法破壊の大謗法行為にかり立てています。その会員たちは、創価学会の大謗法に与同している限り、成仏など叶うはずはなく、必ず無間地獄の苦しみを受けます。

もし池田大作が、一人ひとりの会員の幸福を本当に願うならば、自分のことはさておいても、会員たちを本門戒壇の大御本尊から切り離し、謗法者に仕立てることはないはずですが。

池田大作がどんなに会員を大切にしているのかのように見せかけたとしても、所詮(しょせん)、それは欺瞞(ぎまん)であり、会員をつなぎ止めるためのポーズにすぎないことは明らかです。

このような池田創価学会の実態に気づかず、池田大作を「一人ひとりを大事にしてくれる永遠の指導者」などと思いこんでいるならば、それはあなたが創価学会に洗脳されている何よりの証拠なのです。

⑧「人生の師匠である池田先生にどこまでもついていく」

世間には華道の師匠、書道の師匠等があるように、誰もが人生においてさまざまな師匠や恩師と呼ぶべき人がいます。

仏法においても「師弟相對」の大事が説かれています。人生最大の目的である成仏は、正しい仏法の師に従うことによってのみ成就するので、ですから、いかに世間の師匠を敬っても、正法の師を忘れたならば、人生における真の幸福は得られません。

日蓮大聖人は、

「法華經の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて、余(よそ)へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはひなるべし。但し師なりとも誤りある者をば捨つべし」(會谷殿御返事 御書一〇三九ページ)

と仰せられています。

この「根源の師」とは御本仏日蓮大聖人であり、その血脉法水を継承される、時の御法主上人も「根源の師」に当たります。したがって、「師なり

とも誤りある者をば捨つべし」と仰せのように、「根源の師」である御本仏日蓮大聖人及び歴代上人に背く「師」は捨てなければならぬのです。もし、この御教示に背くならば、六道輪廻の苦しみから逃れることはできません。

現在、池田大作は「根源の師」「仏法の師」に背く未曾有（みぞう）の大謗法者となっているのですから、それに従う創価学会員は、すべて無間地獄へ墮ちることは必定です。

あなたは、池田大作に「どこまでもついていく」と断言していますが、その言葉は、浄土宗の開祖法然（ほうねん）を師と仰ぐ親鸞（しんらん）が、

「たとい法然聖人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔（こうかい）すべからず候」（歎異抄）

と云うて、法然とともに地獄に墮ちても後悔しないと云い放ったことと、何ら変わりはありません。

あなたは、せっかく仏法に縁を結び、しかも師を重んずる心の持ち主なのですから、謗法の池田大作を捨て、日蓮大聖人の血脈を相伝される御法主上人に随順して信心に励み、真の幸福を築くべきです。

謗法を犯している池田名誉会長になぜ罰が出ないのか

創価学会員の中には「あれほど兇下を罵（ののし）っている池田名誉会長に、なぜ罰が出ないのか」と思っている人が多いようです。

日蓮大聖人は『開目抄』に、

「順次生（じゅんじしょう）に必ず地獄に墮（お）つべき者は、重罪を造るとも現罰（げ

んばち）なし」（御書五七一ページ）

「上品（じょうぼん）の一闍提人（いつせんだいにん）になりぬれば、順次生に必ず無間獄に墮つべきゆへに現罰なし」（同ページ）と仰せられています。ここでいわれる「順次生」とは、今世を終えてのちの「次の世」「次の生」という意味です。

すなわち、死後かならず無間地獄に墮ちることが確定している大謗法者は、いかに重罪を繰り返しても、今世での現罰は現れないとの御教示です。

これについて、第二十六世日寛上人は『開目抄文段』に、

「若（も）し順次生に墮獄不定（だごくふじょう）の者は、或（あるい）は現罰有り」（文段一七六ページ）

と仰せられ、次の世で地獄に墮ちるか否か決定していない者は、現世での罰を受けることもあると、御指南されています。

このことから、今世で受ける現罰は「順次生」に受ける現罰に比べれば、まだ軽いものであることがわかります。

したがって、池田大作の罪の報いは、今世で受けねばすむというものではなく、未来永劫に無間地獄に墮ちて苦しむつづけるものなのです。

また、大聖人は謗法者に従っている者について『開目抄』に、

「悪師につかへては順次生に悪道に墮つ」（御書五二五ページ）と御教示されています。

現在、池田大作に従っている創価学会員の中には、今世で現罰を受けない人がいるかも知れませんが、次の世からは、間違いなく悪道に墮ちて苦しむのです。

なお、あなたは「池田大作に現罰がない」といいますが、頼りにしている側近が次々と亡くなる現実には、池田大作は自らの謗法の報いを感じているはずですよ。

事実、池田大作は、御法主日蓮上人に対して瞋恚（しんに）の炎を燃やす地獄界、かぎりなく名聞名利をむさぼる餓鬼界、怨念（おんねん）のとりこになって自分のゆくすえを見失った畜生界、さらには、憎悪に狂って敵対者を攻撃しつづける修羅界の、四悪道に墮ちていることはたしかです。

この姿こそ、無間地獄に墮ちる者の華報（けほう）というべきです。華報とは、未来世に受ける果報の前兆として、現世に受ける報いをいいます。

貪・瞋・癡の三毒にまみれた創価学会

仏法では、人間の悩み苦しみの原因はすべて煩惱にあると説いています。煩惱とは、心を悩まし身を煩（わづら）わせる心の作用をいいます。この煩惱のもとになるものが貪（むさぼり）・瞋（いかり）・癡（おろか）の三毒です。

創価学会は、池田大作の勲章あさりや天下取りの野望を満たすための集団であり、貪りの集団といえます。その集団のために活動し、さらに自分の欲得のみを願い、敵対者を罵（ののし）り倒すことを第一に考えている創価学会員は、貪りの餓鬼道に墮ちています。

また、破門された仕返しのために日蓮正宗を恨み、日蓮上人に怒りと憎しみの矢を向け、悪口雑言の限りを尽くす創価学会、それに与同して憤怒（ふんぬ）の形相で宗門や御

法主上人を罵（ののし）る創価学会員は、瞋恚（しんに）の塊（かたまり）であり、まさしく地獄界そのものです。

また、創価学会員は、創価学会の指導を鵜のみにし、聖教新聞や創価新報などの悪宣伝を信じ込み、感情にまかせて宗門や御法主上人に対する怨念・憎悪をつのらせています。自分で物事の本質を見つめることができず、冷静に判断する理性を失った学会員は愚癡（ぐち）そのものであり、畜生界の姿です。

日蓮大聖人は貪・瞋・癡の三毒について、『観心本尊抄』に

「瞋（いかり）は地獄、貪（むさぼり）は餓鬼、癡（おろか）は畜生」（御書六四七ページ）と仰せられています。

この御教示からも、貪・瞋・癡の三毒にまみれた創価学会員は、三悪道の苦しみから免れることはできないのです。

『折伏教本』より抜粋

